

靴下業界の老舗名門企業が、今再び息を吹き返そうとしている。

同社社長の西村京実さんの祖父はかつて日本靴下協会の理事長を務めた人物。業界の全盛期、一九七〇年代のことだ。今も同社と協会に大きな胸像が飾られている。

「会社の創業者は曾祖父です。どういうわけだか女系家族で、実は祖父も父も婿養子でした」

西村さんも三姉妹の次女として生まれた。最もやんちゃだったこともあり、男の子が欲しかった父からは、長男のように育てられた。

「物心がついた時の誕生日プレゼントは、野球のバットとグローブでした(笑)」

そんな父が、四二歳の若さで急逝。西村さんが中学一年生の時だ。ショックを受けた祖父は会社を壟むだが、番頭(補佐役)をつけてくれるなら私がやつてもいい、と母が申し出る。専業主婦だった母が、経営者への道を歩み始めた。

「私もそうでしたが、経営というも

ういうわけだか女系家族で、実は祖父も父も婿養子でした」

西村さんも三姉妹の次女として生まれた。最もやんちゃだったこともあり、男の子が欲しかった父からは、長男のように育てられた。

雇い、自ら提案できる工場を目指した。アパレルメーカーと新たな取り引きが始まり、希望通りの価格で靴下を提供できるようになつた。

「ただ、下請けの事業に比べればスケールは小さい。現場を仕切る人たちはからは、お嬢が何かやってるくらいに思われていました」

経営を担っていた母とともに衝突を繰り返した。生きてきた時代が違う。考え方は一致しなかった。

工場閉鎖の先頭に立った 苦い「後悔」の記憶

大きな転機が訪れたのは、入社三年目、二〇〇三年(平成十五年)のことだ。中国に視察にかけた母が大きな衝撃を受け、岩手県にあった工場の閉鎖を決断したのだ。

「中国の靴下工場には最新鋭の機械が数百台も並び、従業員の月給は七万円ほどでした。母はそんな現実を見て、もうこれ以上戦うのは無理だと思つてしまつたんです」

最盛期には三〇人いた工場の従業員は、八〇人ほどになつていた。業界では工場の撤退が始まつておらず、中にはギリギリまで追いつめられて倒産する会社があつた。

Case 2

老舗の使命感を胸に、靴下づくりに懸ける

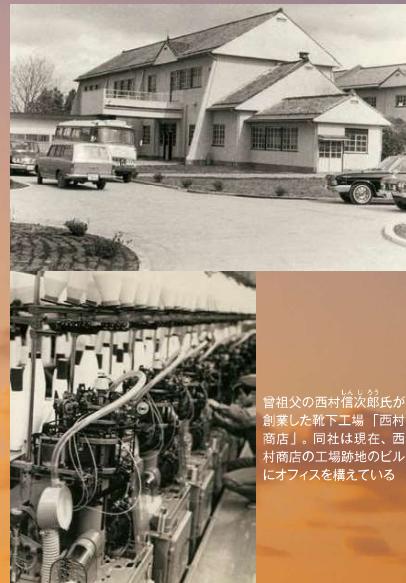
西村京実

株式会社アイ・コーポレーション 代表取締役



撮影 編集部

同社の高級靴下ブランド「idé homme (イデ・オム)」が好評を博している。しかし、かつて老舗靴下メーカーとして名を馳せた同社の前身は、中国との価格競争に敗れてやむなく自社工場を閉鎖した過去があった。工場閉鎖で苦い思いをした西村社長が、それでも靴下づくりを諦めなかつた理由とは――。



曾祖父の西村信次郎氏が創設した靴下工場「西村商店」。同社は現在、西村商店の工場跡地のビルにオフィスを構えている

「今なら退職金も払える、という」とだつたのだと想います、反対しようにも、私には何の力もありませんでした」

だが工場は祖父や父との想い出がつまつた場所。工場に行くと、母は涙に暮れてしまう。西村さんは、「工場閉鎖はしがらみのない自分がどうおこう」と決めた。それから約半年、工場には、すでに受注していた商品があった。正義感からしっかりと納品しようと考えたが、途中でそれは甘い考えだつたと気づかされた。

「従業員は不安で仕事が手につかず、不良品が多発してしまふんです。この時の「後悔」は西村さんの中に

かつたものもあつて、それはもう押しつぶされそうでした」

工場には、すでに受注していた商品があった。正義感からしっかりと納品しようと考えたが、途中でそれは苦しい時期を過ごす。

「全員が解雇を告げられています。これからどうなるのかと工場全体に不安が渦巻いているんです。まだ若

いが、どれだけ大変なのか知らずに飛び込んだんです。あれほど厳しかった母が、毎日泣いていました」

そんな母を助けたいと思うように、西村さんは、大学に進学し、カナダとフランスに三年間留学。さらに経営コンサルティング会社やIT企業で経験を積み、二八歳で家業に入った。しかし、そこで西村さんを待ち受けていたのは、想像以上に旧態依然とした工場の体制だった。

「びっくりしました。江戸時代みたいたと思いました。口約束での注文。取つてもらえるかわからない在庫の山。工場に研修に行くと、新参者は口をきいてくれない職人もいました」

大手靴下メーカーの下請けとして長く製造を担つていた同社は、その高い技術力にもかかわらず、取引先からは「いいものをとにかく安く」と買ひ叩かれるばかり。中国で靴下の製造が拡大しており、コスト競争が激しさを増していたのだった。

「でも、みんなが幸せになれる適正価格でモノを作らないと、長続きはできないわけです」

西村さんは下請けからの脱却を図るため、企画担当者とデザイナーを